平石先生という読み手
——序に代えて

諏訪部浩一

我々はどうして論文を書くのだろうか。これは真面目に考え出すと、正直に答えるのがなかなか難しい問いであるように思える。おそらくは、論文の数だけ、あるいは書き手の数だけ理由があるのだろう。しかしながら、書き手の側にさまざまな個人的事情があるにしても、論文とはやはり読み手に向けて、つまり誰かのために書かれるものであるはずだ。だとすれば、この「誰か」こそが、その「個人的事情」の核だといってみたくなる。事実、誰のためにも書かれていない論文などというものが仮にあるとすれば、それは言葉の真の意味で空疎な論文でしかないだろう。

このように考えてみれば、平石貴樹先生の「退官記念号」として——先生には秘密裏に——企画された今号の掲載論文数が、近年では最多となっているのは当然という他はない。1986年のご着任以来、東大英文科で長らく教鞭を執ってこられた平石先生のご退職という節目に、在学中の大学院生達を中心とするメンバーがぜひとも論文を書かねばならないという気持ちに駆られたことは、『ストラータ』同人諸氏にとっては極めて自然に思われるはずだ。計画の立案から刊行までの期間の短さという外的要因もあったため、投稿／掲載を希望した全員の論文をお見せすることができないのは残念ではあるのだが、彼らを含めた若い同人達の熱意を1人でも多くの方に感じていただければ幸いである。

だが、いうまでもなく、熱意だけでまともな論文が書けるわけではない。もっとも、あえて「まともな」というそれなりに高圧的な形容詞を付してみたものの、これは「読み手」として平石先生を想定しながら「書き手」となることの負荷に比べてみると、あまりにも軽すぎる言葉だろう。実際、大学院での平石クラスに出席していた者であれば、その独特の緊張感を——数日前から夜を徹して書いた発表原稿を早口で読みあげているときに先生が走らせる鉛筆の音や、読み終えたあとの「ええと」と始まる先生の言葉を待っている数秒の間などを——誰もが憶えているはずだ。

そうしてぶっきらぼうなトーンで口にされる平石先生の講評は、もちろん厳しいものであった。しかしそれが厳しいのは、単に議論の瑕疵が容赦なく的確に指摘されてしまうからではない。それだけのことにすぎないなら、頭を下げてやりすごしておけばいいからだ。ここかしこの弱点をテクニカルに修正しさえすれば、それなりの「論文」に仕立てあげられるかもしれないと、思っておけばいいからだ。

問題は、発表者自身が意識していなかった議論の「可能性」を、平石先生が見抜いてしまうことだった。恐ろしいのは理解されないことではない。理解されてしまうことが、何よりも厳しいのだ。だから先生の「厳しさ」は、むしろその「優しさ」にあったというべきなのかもしれない。「今回の発表はこういう話だったよね」というコメントは、まさしく叱咤激励の言葉だった。それが激励であるのは、自分が考えていたのは無意味なことではなかったと思わせてもらえるからであり、叱咤であるのは、実際は自分がそう考えていなかったことに気づかされてしまうからである。

かくして平石クラスの学生達は、先生の言葉に「まあそうですね」と曖昧に答えながらも、読まれてしまうことの意味を噛みしめることとなった。もちろん、書くことの責任を噛みしめたといっても同じはずである。論文というものは、常に読まれてしまうものであり、常に理解されてしまうものなのだ。どうせ読まれやしないのだから、どうせ理解されやしないのだからという言い訳を書き手に許さない存在として、平石先生という読み手はいた。そしていまでもそこにいて、書き手に負荷を与えている。

そのような重くありがたい「負荷」を、若い教え子達がどのように受け止めているのかは、この最新号の各論文が十分に示しているはずだ。なお、『ストラータ』の創刊は、平石先生が英文科に着任されたのと同年、1986年のことである。「層」の形成に先生が与えた深い影響を総括することなど、この拙文においてはもとより、おそらく誰にもできないだろうが、同人名簿を眺めてみれば、誰もがその影響の深さに圧倒されることだろう。しかし圧倒されているだけでは、あるいは——どれほど深い感謝の念からであっても——頭を下げているだけでは意味がないというのが平石先生の教えであったはずなのだから、とりわけ執筆者達の先輩にあたる同人諸氏におかれては、ご自身の進まれてきた道を振り返りながらのご高評を、ぜひともお願いする次第である。